主従心得草三編

下

ロ 9
4087
2

門 ロ9 4087 2 巻

主従心得草三編下目録

一 山本勘助松田七郎左衛門と軍法論談の事　二丁
一 兵法の書始めて我朝へ渡る来由の事　五丁
一 大公望孔明ハ始めより軍師とある事　九丁
一 山本勘助松田と剣術試合の事　十四丁
一 山本勘助北條氏康御目見の事　十七丁
一 山本勘助義元御目見の事　九一丁
一 列禦寇國君よりたまはる米穀をめへと事　九四丁
一 平原君趙勝天下の賢士を集むる事　九七丁
一 平原君愛妾を切て天下の賢士用ゆる事　九八丁

加州 橋立 清

一 今川義元候木下を用ひざるハいかゞまりとりの事 三十四丁
一 今川義元候討死おもふ事 三十六丁

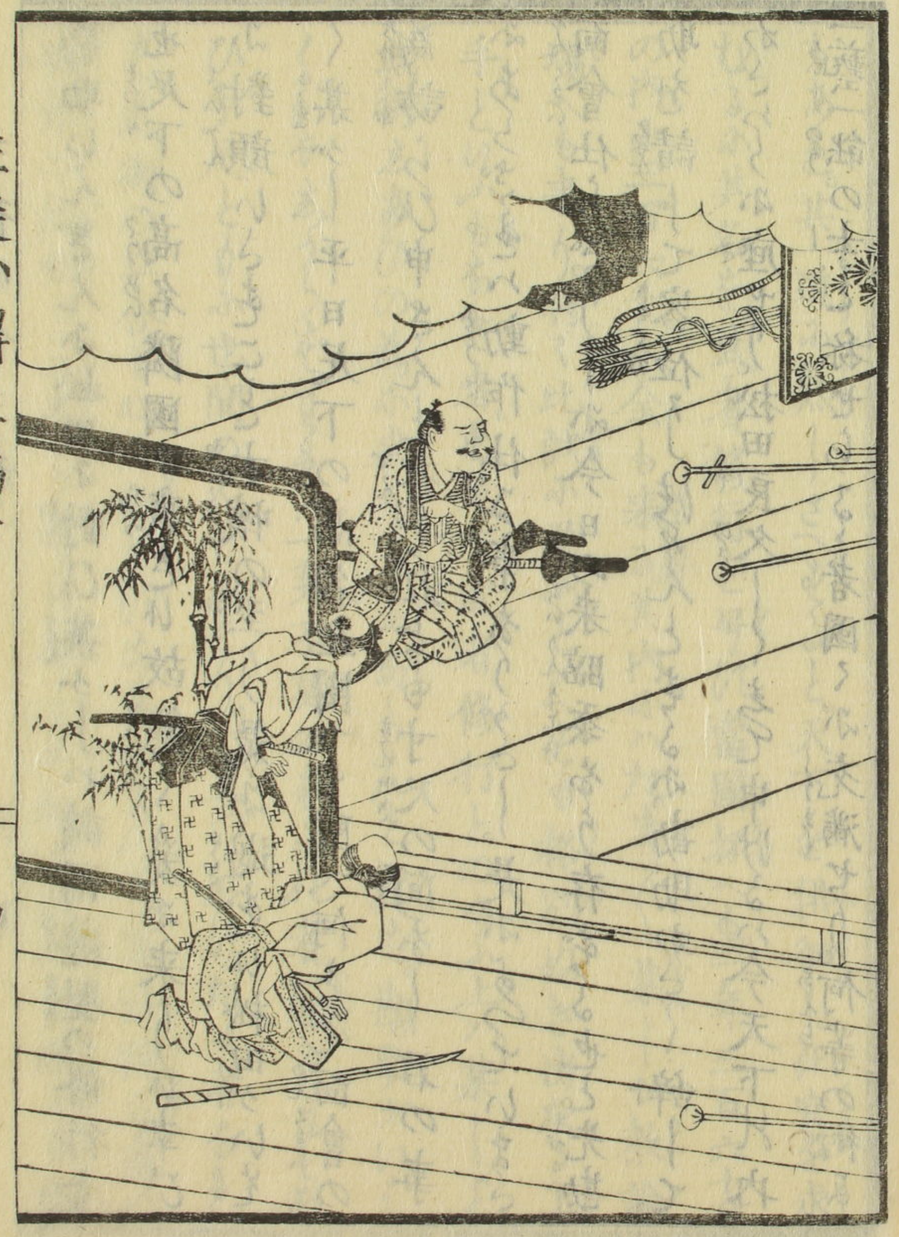
主従心得草三編下

○天下を治め家をおこすの一大事ハ。よき臣下を用ゆるふかり。治世さへよき臣下があ〜てハ治まりがたし。いそんや乱世ふハ猶更大人用とするべし。是ふかりてよき臣下を急度求めもふ度し。今川義元候ハ家来庵原安房守ゲ山本勘介ハ。才智武術共ふ万人ふ勝ぎたる者なるべ。御用ひあ川て然るべしと。強てもとめけるども。山本が見ふくきを以て。用ひあそ度。鬼角義元ハ賢不賢を見ることあさとべ。又賢人ハ國の寶とりふ事も篤と考りあそぬと見へたり。其次第を少く下り考るも度し。甲

越軍記初編七ゐいそく本朝大永天文の間。劍戟鞘を出るの時。俠勇の士。劍を佩鑓を荷ひ諸國を往来し。用ひらるゝ事を專らとせり。爰ゐ山本勘助も三州牛窪の産ゐて武田晴信公いまゞ勝手代といひし時。そうゐ主従の内約をゐくめ。天文三年の春より心ゐ深く思慮あり夢兵法修行する事よせ。關八州を徘徊し。東ハ奥州の果までも隈なくゐるき。或ハ半年又ハ三ケ月所くゐ逗留し兵術を試ゝ軍法を討論し其國くの弓矢の法。諸士の剛柔を見廻りける。その比英雄の大名天下ゐ満武藝者と呼る者家くゐ備もきり。中ゐも相州小田原北條

相摸守平の氏康ハ伊豆相摸を取。勢ひ近國をとろきけもぞ。かの家の弓箭の法を試むべしと。小田原の城下ゑ至りぬ。其頃北條家。武術の師ゐ。松田七郎左衛門といふ者ゐり。渠ハ十文字の鎗を鍛錬し隣國ゐあらぶ者ゐゝと聞えしゐより。かもゞ方ゐおりむき。其人物を見て。此家ゐ逗留せんと松田ゞ家ゐ案内しゐもバ。折節松田ハ稽古所ゐり出門弟共ゐ鎗術の教授をして居たりゝゞ。勘助来ると聞て。人を出し請ゞ入其容貌を見るゐ至りて小男ゐゝて其上ゐ片目趨跛也。座中ゐあり合若者とも。是を見て目と目と見合せ。笑ひける。

山本勘助松
田七郎九郎門
と軍法論
議の図



勘助いんぎんに松田に對ひ。某ごゝに諸國遊歷の修行者也足下の高名隣國に聞きい故慇懃爰に來りい幸ひに對顏いさゝこと本懷の至り是に過ぎい松田がいそく某ごゝ平日足下の高名此國へも聞へ何とぞ面會の為。訪らひ申さんと存ぜれども寸尺の間おし。君の事ふあらざるを動作仕る事ありがゝし。是によつていまぞ面會仕らざりしに。今日の來臨忝なう存ぜる也。先勘助を請ぜて客位りはさんとするに。勘助かさゝ辭して。かさらに座せり。松田良久しゝ考て申けるは。今天下れ内一藝一能の士と称せらるゝ者國くに充滿せり。何等の術なもあるを。其一道に熟しさへすると。天下を徘徊し。仕官を求むるに其名を。武者修行と号し當國抔へも。一年三百六十日の内に三百六十人余も來る。其内にはたまゝ某しゝが教諭場へも來り。時々比試に及ぶといへども格別ぬき出たる上手とりもあき者也。足下武者修行とのゆふ上は。某しゝと武術を比ひの為に來りあらんといへば。勘助がいたく。いかゝ考らるゝ。ときは一身不具のまゝれ者。一眼をうしなひ手足とりふ世間の人とあもり。一度づゝかけたる者あるをば。武術の立合も心に任せびあるをふよつて。軍法陣立或は城郭の繩張を工夫し。專ら孫子呉起が兵法を講ず自然

軍法ゐ長じたる人あらざ。其人と討論し身の及ハざる所を修行仕らん為あり。夫故ゐ國くゐ於て高名の人さへあるべいんぎんゐ訪ひ高論をもらけまゐる者也。此國ゐ於てハ足下の高名。隣國ゐ流布せり是ゐよりて一番ゐ貴兄の元ゐ參りたりと。あへて武術ゐとりあそざるべ。松田ゲいたく然らバ軍法。あも張の事を宗として。修行し給ふあらバ。更ゐ某ゲ預る所ゐあらむ。そのくたくき事ハ存ぜぬといへども。凡そ軍法の起りハ人王九代開化天皇ゑ御宇漢土より履陶とりゐ人初めて太公望ゲ六韜孫子ゲ十三篇を渡せり。其時ハ前漢の景帝の代ゐあさまりと

りゐ。ちくるゐ本朝文字の学いまゴ行ゐ日きむ。うの兵書ありといへども。こまを讀事あさたぶ。其まく朝庭ゐ傳をりし所。人皇十六代應神天皇十六年ゐ百濟國より王仁とりゐ者来り漢土の學始めて我邦ゐ行りき。天子もらきを学ぜぜゐひ文字の意味是より解得して其後かの履陶ゲ奉りし所の兵書もよむべきゆりゐあり應神天皇えいらんまくて熟く思召けるハ此書ハ兵者をちゆるの法也。し是を世上ゐ押ひろむる時ハ。諸人兵者を用ゆるの法をちらむ叛逆を起さ者多かるべしと思召て。忽ちやき失ひゐひける。其後人皇六十代醍醐天

皇の御宇ふあくり兵書ハ國家を治むるの道あり它
りふ事を聞し召ま。延長元年五月大江の維時とりふ人
を入唐せしめ。兵書を求めてかへくしめあふ。是より兵
書まゝと朝廷ふ傳たりしうども用ゆる人ふし。合戰乃
道ハ漢土の兵法をうゝぜして我國ハ唯自然と戰ふあを
て兵を用ひゝり。もでふあをよりさき神功后宮三韓を
征伐しあふ時。いまゞ漢土の兵法をもろしめさるもぜといへど
も。三韓を切ふあをめ帰朝まゝしくたり。是自業自得の兵法
ふして學びゝる道ふあらぜ。扨その後天慶の頃將門純
友をせめらをし時も。いづをもの兵法ふよるとりふとを聞ろ

ぜ。皆敵をやぶり乱ををづめくり。ゝの維時卿漢土より法
たへ帰りし兵法。初めて武家ふ用ゆるゆうふありしへ。人皇
七十二代白川院の御宇。八幡太郎義家公朝庭へ奏聞を遂
あひゝの兵法の書。朝廷ふ秘しあきあふとも。何の益ゝ候
そうん。天下を治め主上を太平の御代ふ置奉る事ハ武家ふ
あり。頼ゝくを左大弁大江維時傳来の兵書を武家へつ
たへらを下さらべありがゝくし奉存と願ひ申さをけを
ぜ。早速勅許まくしてふの維時卿より六代目。大江
の匡房卿ふ勅して。太公望孫子呉子等の兵書の大事を
石清水八幡宮の御宝前ふおいて。悉く傳授せゝらを。是よ

ゐ八幡太郎の宝物とあをり。義家公思慮〜ゐふ異國と我朝とハ土地人氣。ひとし〜からぜ。人氣ゐ應ぜざるこをハ。兵書といへども用ひがたき所あり。異國の道を以て我國の人氣ゐ叶ふゆゑゐをべし〜と兵法の書を取捨〜ゐき直して訓閲集とゐふ兵書三巻を作り。虎の巻と名付子孫ゐ傳へらるゝ。其後源義經虎の巻を熟学〜て兵法の大事を摭め。平家を一の谷又ハ八島ゐゆぶりゐふ是皆虎の巻の德ゐよをりとらけゐのゐをる。其後楠正成新田義貞の如き豪傑ゐらび起るといへども。唯何の兵法いづをを流義を以て敵をやぶり〜といふこを聞ぜ。唯戦場ろ

數をふんで。虚〜実〜の妙義を知りゐへり。然らざをを実の兵法とハいひがた〜。足下ハ三州牛窪ゐ生を人數五十人とも持ゐふ人とも兼らぶ。破をてる城一ッを持ゐひたる事ゐ〜。一邑一村の主ゐもあらぶ。いとづゐふ畳のうへゐ人形をあらべ。土をつゐ孫て。城郭の形ちを作り。ゐ〜のごと〜せて。敵をやぶるゐ便りあをゐ。ゐ〜の如〜せど城のかまへ堅固ゐりと二十分一の小形をつくり。胸算用をゆる〜ハ倍ゐりゐ畑の水練と申を者ゐて。役ゐ立ぬ事也。太平の時ゐ〜この上ゐて高論をゐふ時へ。何事を申をともよけをどゐ。まとゐの戦場にのぞ〜。ゐよたいこをあら〜。矢炮

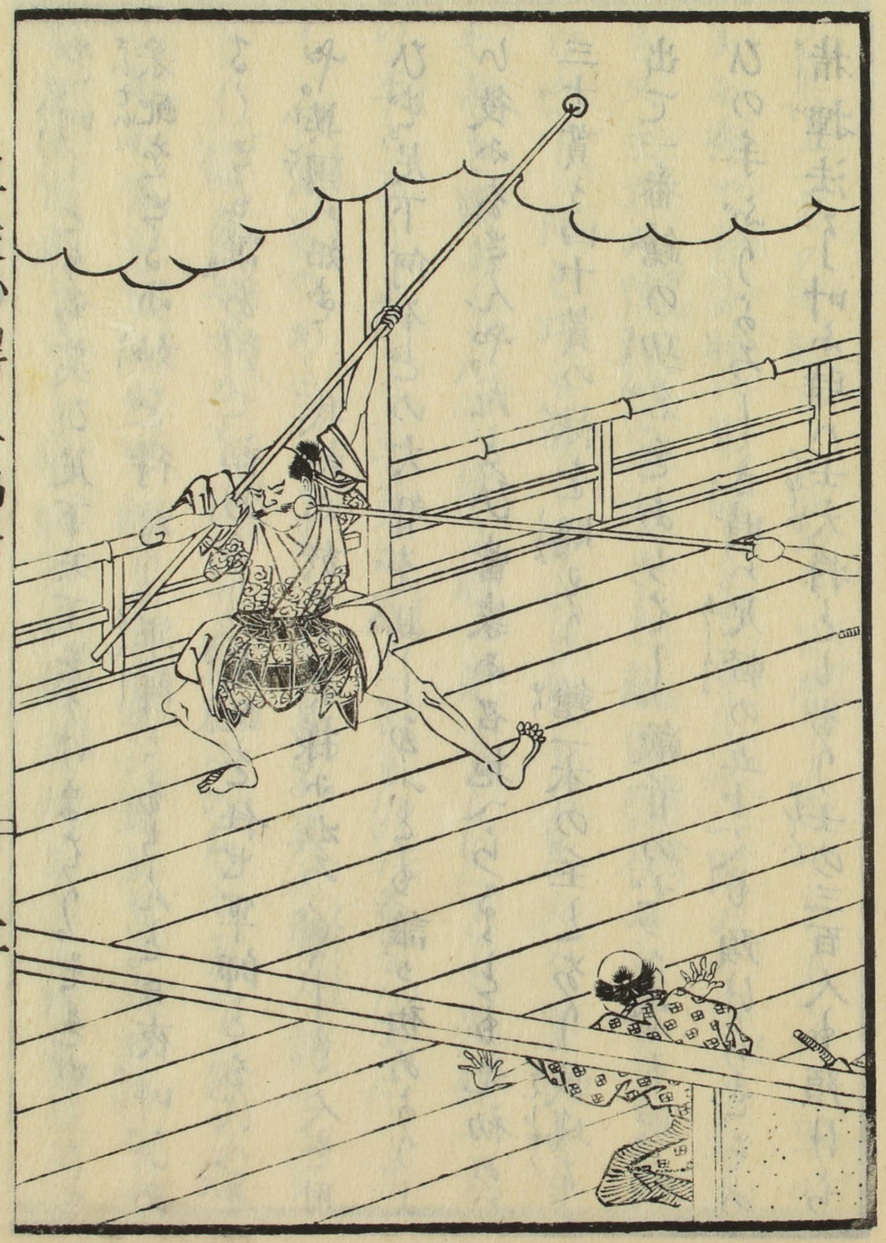
を飛を時ハいたりてハ心膽取みだるを号令行ハるをず。
采配も行届らぬ。内ハ在て利害を存ずるとハ甚ぞ相違
ある者也。論のミ高くして業ハかゝるてハさつたり埒明
ぬ。日頃の論ハ虚論ハして。何の益おき事也。然らバ軍法ハ
法則ありて法則ハし。弁論ハ只舌の先の強者ぐいひ勝と也。
傍若無人ハ罵ちりれば。勘助ハ笑をふくみ。足下ハ高
名の師範ぞり。元そ一藝ハ秀たる者ハ。万端ハかゝ〜おき
者也。是ハよつて高論もあらんとおもふ所ハ案の外ハ
る論判。世上無智の倍人ハおゝ。未ぞ古をおをのぐを
ざる浅ま〜き論ぞり。我ぞりあるをざるハちゝ〜といへ

ども。少〜ぞり口をひらゝ〜べ〜。夫智ハ上中下の三ツあ
り。上智といふハ天性の聖人のごとき者是ぞり。中智を
いふハ學んで自然ハ妙ハいたる。下智といふハ區てたる世
の流倍ハして。足下のごとき人是ぞり。下智ハして上智
の人の心をちる事ぞし。上智ハ学ばゞ〜して自然の妙處ハ
いゝり。工夫をゝゝぢして其よろ〜きハ當る。上古の太公望
の類是ぞり。紂の乱をさけて。東海の濱ハ居り其後渭
水ハ釣をたを。八十歳ハあまる迫身ハ従ふ物とてを。一
本の釣竿のミ。奴僕の一人もつゝふ事おき水辺の釣翁ハ
り。然るゝ文王の夢ハ入り。忽ち軍師ハ拜せゝを石窟

を出て殷の紂王をやぶる時ハ。車ゐ座ゝ團扇をふり。牧野の戰ひゐ。七十五万の敵をこなごゝゝゐ致し。周家八百年の基業をひらけり。又諸葛孔明ハ卧竜崗ゐをる隱者あり。蜀の玄德公ゐつゝ廿七歳ゐして柴の扉をおゝひらき。魏乃強兵を破り漢中巴蜀の大敵をくだき。一代の間ゞ終ゐ敗軍の事を聞ぞ。大公望孔明ゞ輩一國一城の主ゐて數度の戰場をふゝたりとふ事もあり。最初より軍師ゐ拜せらるゝ。大敵をうちひしゝぎ。味方十分の勝軍とゝゝゝ。是上智ゐ致を所ゝり。兵者を遣ふの道ハ閑居のいとゐ在ゐゝ心ゐ練口ゝ論ゞて其真妙をよゝく極めゝる者也。戰場ゐ出て

戰ハゐさゞといへゞども。真の戰場ゐ望むの日ハ戰ひゐ少ゝも過失ゐあり。実學実智を以て鍛錬をるゞ故ゐり。疊の上ゐ兵法ハ真の戰場ゐのぞんで物の用ゐ立ぞとふハ。元来下愚の虚智を以て。虚学をもる者の事也。無智の者の知る所ゐあらぞ。某ゝゞごときハ。一邑一村をもたりさゞ。軍兵を五十人ゝとも牧ひゝ事ゐゝ実ゐ貧乏窄人あり。然ども今ゐも豪傑の大名ありて。そもゞゝを用ひ采配を執らゝめゞ攻城野戰ゐ敵をゆぶり堅きを碎き利きを挫ゝき。高名手柄をあらせさん事。まのゐとりありと。唯一言ゐ答へける。松田を勘助ゞ答話ゐ足下ハ下愚の小人といひゝをいり。顔色を

山本と松田と槍術試合の圖



かゝ呵〻とうち笑ひ。足下天下をうけまたり。そもがしこそ采配をとるゐ妙を得たり。軍師とあらんと。日夜叫びあるくとも。誰あり〻て初めあらう。采配を任せ軍師とあんべきや。異國ハ知ず　我朝ゐ於てハ其様ゐかろぐ〻人を用ひず。足下何ゆどの大智を具しあゐとも。誰ゝ初めゆゝよい役ゐおさんや。たとひ當家ゐ召抱へらるゝとも先初めハ三十貫ゝ四十貫の禄を賜ゝ鎗一本の主とあり。戰場ゝ出て一番鎗の功名をあらそし。敵首の七ッゝ八ッも取。戰ひの手ぶりよろしき時ハ。足軽の五十人も預けらるゝ。その指揮法ゝ叶ふ時ハ士大将ともあり士の三百人も預けらゝ其上一方の大敵をもゆぶり目覺しき功をあらハし。軍略実ゐ秀でたる時ハ。軍師ともあ〻て一國の士の上ゐあらゝ。又主君の陣代ともあさゝ。敵國誅伐の大将ともあしあんべし。何ぞ功もあくたらきもあき人を軍師とおもゝ。然る時ハ足下といへども先鎗一本の主とあり。夫より次弟ゐ進とあるべがあひだ。某一今貴客のかゝちを見るゐ一身不具の廃人諸士と同ゝ鎗を取。太刀を提けて戰ひゐ。のぞこあらぶ。忽ち敵の為ゐ首を取らゝ。軍師とある事ハ叛あき一人前のそゝらきも出来ぐ〻し。矯脚の支離者何ゆどの智恵あらゝ

も。齒ゐわくるゐたくまでと居丈高ゐありて罵ちりけをで。勘助志ゆくゐ答へくるゐ。凡そ采配を握り軍師職とあ者ゐ。先下ゐありて兵粮を炊く人歩の業より上ゐいらて大將の行ゐいたる迫。悉くちくまでといふ事ゐ。いえんや武士一人前の業をおさびして。口をひらくば是狂人の所為と申す者ゐり。何でおぞへゐくて。口をひらくんやといふ。松田ゐいをく。今の世ゐ武士一人前の業といふ槍術ゐり。其故ゐ戰場の勝口ゐ一番槍二番槍といふ事ゐり。もしくりの試合ゐもせよ。のゐ所虚言ゐくば某しゐ槍先ゐ立て比校志ゐへ。勘ゐぶいをく。もをあくて比校を好

まるぞ。凡そ人の情として。勝時ゐふろこび負る時ゐいきどほる事。古今ゐ通例也。某しゐ壯年の時。眼流といふけんゐつを好こ。又槍術を鍛錬しゐ諸國を徘徊して修行をる内。比校ゐ打負くる日ゐ。別条ゐく安穏ゐり。又勝を得る時ゐ。いきどりをふくまを。深更ゐ及ひ。待伏ゐあひ殺さをんとをることたびくゐ也。又ゐ大勢黨を結び理不尽ゐ打果さんとをる危難ゐ合ふ事數をちぞ。其たび毎ゐきびを蒙り手足を折を眼目を失ゐひ。かくのごくゐる支離とゐる。もをゐ生を付のかををゐあらぞ。志あひををる度毎ゐ意恨をふくまを。きびをつけ

らをして今ハ奇特のたい人とあり。勝負事比校事ハ出来
かゞ〜其勝を得さるハそもゝゝが人をたゝりて勝た
るあらぶ皆かもゝが手練の未熟よりおこもり。唯今とて
も同〜事也。そもゝゝ〜今日足下と比校をもることも
需めて仕る事ハあらも。豆下勘助がいふ所。口と行ひや。
ひと〜きやいあやを試さんとの事ありといへども自
然某〜僥倖ハして勝を得たる時ハ。足下の修行未熟
ハして。其科某が預る所ハあらぶ。後日ハ怨こをふくむ
まゞき公平の心あらぶ。勝負ハ自てたゞひハ恨こをふく
むまゞきといふ。誓約をうさゑ。木刀を以てとろ見る

〜。若いきどふりをふくむ心あらバ某〜が只今の過言
をゆるして歸〜ゑへ。藝術をうり物とし。禄を求めん
が為ハ徘徊もるものハあらぶ。むさまら。立起たる君子ハ
逢て自已の修行をおさん為あり。此道理をよく察〜王
へと申ける。一座の内ハも其高論あるを感じ。比校を止む
るもあり。又ハ勘助が今の一言穏當ハして。比校を辞〜。此
場を遁もんともを心得たる者ハ。ひらハ一試合〜ゑへと
もゝむる者も多〜りける。元来松田ハ自已の藝術ハたゝぶ
り人を人ともせざり〜ゝべ。止まる氣色もあく。勘助ハ
向ひ申〜けるハ。某〜決〜て後怨をいゞくまゞ。又あ

あゞちいきどゝりを以て試合をまるゐなりゝば。貴客の武術勝をたるゐ於てハ。主君相摸守へ吹舉致し君の為ゐ足下をそぶむる心術也と強て止ざるゐより勘助も。然らゞとゝゐて身をとゝのへ比校の用意をおしゐかける。此時松田が門弟弓も引方といふ。諺ゐひとしく。ゑさまとゝ松田ゐ勝をさらせんと。神水をのんで視ひ居る。門人鎗を取て双方ゐあゝへけるバ。勘助其鎗を見るゐ柄の長さ二間ぜゝり。先ゐ廉の皮の牡丹を付たり。勘助ハ左の手指二本のミ。されども如指のあひだゐ中りの柄をたゝき。けいと呀の中央より進ミ出元来小兵の上。一身不具の人物。勝べきやうハ

え見へざりけゐ。松田ハ身の長六尺ぜあり年齢四十あまり。めゝて。勘助とくゝゐぶるをバ。後ハ為ゝ見るゐ見えゐかける。互ひゐ辞義を致しまでゐゆり頭を進め近付とひとしく。電光いかづまのごとくゐ。早業を交へ突ハ。何も屈伸自在の妙手。些しも透間あらばこそ。互角のゐるまひ肩ぜおとゝゐ戦ひける。此時志あひをまゝめゝる門人ハ。手ゐ汗をゐぎり。止たる門人らハ勘助が鎗術凡夫のもざゐ為ゝるを見てよゝ。おき比校をゝとめゝるゐのゐゐと片渡をのんでおゞめ居る。勘助が鎗術たるゐゐこへ身をひるゞへし。突入と見へたる時。松田ハ面て

をつきて。尻居がどうと倒きたり。一座の門人此有様がお
どろき声をのんで。一言も出さを者なく。いづきも顔を見
合せて居こうける。其後三度迫試合を致せしが。手段少し
もかちこうび。鎗法抜群が勝きさう。松田ハ勘助が不具な
して練磨の功卓絶あるをこうんじ。大いがざんぎを致し。諸
門人と共が勘助を上座がして。誠が唯今の御手練某が
輩の及ぶべきがあらず。この年頃鎗術者と云者が出合数
度其藝を心見るといへ共。今日の如く目をおどろかしたる
事なし。此一術を以て余の妙技をも推察仕るが堪さ
り。我家が数日逗留しがもぐ主君が吹挙致し。當家へ取

持仕らんと申しけきを。勘助ハ松田が疑念をさらひ。腹中
が物あきをこうこび。がくして十日ばかりも渠が家が止まる
うける

人を殺したこう其恨こうで殺さきる。此方があざをし
たがこう。憎いといふハ尤あきを共。已きが無器用未熟がて。人
が貧がぐこう勝たる人を恨こ憎む是ハ大ひある無理
あきを共。こうくある事也已きが未熟でまけたこう勝さる
人を師匠として習へだこういがそこがハせびして。恨こ憎こ
て闇打がせんとまるがこう誠が油断ありがこし。人を
人がひいでると存じこうび人が憎まることあり。

高木ハ風ゐ吹折らるゝ。出たる杭ハ頭らをうつるゝの道理あり。用心まべし〳〵是ハ兵法劔術勝負事ばかりゐあらず。存ゞの外出世を致し身上をよくすると。是を憎ゝそ孫む人あり。狂哥ゐ○中のよい隣りゐ今ハそしりける此頃藏を立てゝ後○貧のくせ恩ある人をゝまをつて不沙汰のゝやゝげどをいふ誹りを受恨ゝを受る筈ハあけを共受る事あり況や勝負妻色欲の恨ゝ抔ハ又〳〵一際深くして思ひよらぬ災難ゐあゐ事あり急度用心まべし〳〵

松田七郎左衛門ハきゝうゐ大守氏康へ吹擧ゐけるべ。然らば勘助ゐ對面せんと城中へ召をける。山本勘助ハ松田ゐ隨ゞひ登城いたし一座の為体を見るゝ。先上段ゝ相摸守氏康の座をまうけ。いまゞ出座しゐ。左右ゐハ松田尾張守。大道寺玄蕃。其外の諸士ぎぜんとして著坐し其体甚ゞ嚴重也諸士勘助ゞ一眼ちんをあるを見て。互ゐ目と目を見合せ。笑ひ居る。ちらゝ〳〵有て氏康上段ゐ立出ゐひ。勘助ゐ對面ある。其体尤おゞまゝ勘助平伏して拜し仰いで側を見るゐ翠簾をかけれる一間あり。其内より異香ふんいくとして鼻をうゞゐゝゞゝ也。此所ゐハ数百の女。今日勘助ゞ氏康を拜まるを

今川義元城門の圖

山本勘助

庵原安房守

見んと。みものひま几帳のうげより。のぞき何とあく〜ひそめき呻く体。かまゞもてきき事うぎりあし。勘助拜顔終りて座を立んとまるゐ。一身不具ある上。ちんぢあるをば立居飛ぐ〜。氏康おのびぐ〜やありけん。嗤〜と笑ひあへど。最前より声をのんでこらへたる近習六七人。笑ひ袋の緒をきらし。声を出して笑ふめど。厳重ゐ座したる諸士同音ゐ笑へど。一間の内ゐあみ居る。女房共。おきぐゐ笑ふも女の常あるをだ。ゐをを忘をて笑ふ声。雷づちのあるゐとあらむ。流石容形の。こゐ〜きををぐる事おき勘助も。赤面してぞ退きゐる。氏康左右を見

あへりて。扨〜見にくき者もあをだなる者おり。七郎左衛門おきりゐ推挙せ〜ゐありて。對面ハいく〜たれども。是ほどの不男とハ思ハざりき。彼たとへ何ゐど多能ありといへども。あをていの人物何ゐどの事うあらん。當家人ゐ事をうきたることく。四体具足せざるものを抱へて。何の益うゐらんとのあゐゐ。松田大道寺も勘助が不具あるを見て。敢てよろこばゞ。七郎左衛門ハ松田尾張守大道寺玄蕃ゐついて。さゐぐゐかさとをといへども。あ川て執持人ありゐ〜ゐより。是非あく城中を下り。勘介ゐ向ひ此よ〜をゐさりけをば。勘助莞尓として申〜けるハ。

諸州を往歴して國々の諸侯かまへ〳〵うども。いまゞ今日のごゝくあるを見ゞ。号令嚴重あらざる時ハ。其国極免て危き事あり。當家の如きハ東國一二の大家也諸士の多きこと星のごとし。威令を以て諸士を治めゝ。大國をたもちがたし。今日の為体〳〵たとへ勘助がふるまひ見ぐるしくもて。笑ふか忍びぐさともも。大將の座前恐きありと思ハゞ。何条笑ふことのあるべきや。ひつきゆう大將を大將とせざるゆへにて。おのづから笑ひも出るのあり。又かさたちの一間見るか。多くの侍女ども内かあつて。ゆきを見物せり。是又女色を重んじあふがいなき所あり。色をとのゝ威權をみぐるハ亡國の端あり。足下何ゆゑ勧めあふとも御用ひあし。されも又爰かそゞまる心なし〳〵とりふ。扨勘助ハ其翌日振行の用意をあし。小田原を打立んとまるるか。松田ハ此ゆゑ勘助が実智實学あるか伏し。憑てとして別るゝふ忍びゞ。止むるといへども。ほへて止まる氣しきあし。勘助ハ此ほどゝり松田がねんぎんあるを謝し。小田原をいで。夫より鎌倉かあゆむき扇谷の上杉修理大夫憲政の方かいくり。爰か止まること數月。そもゝより又上州か趣き。倉ケ野越中守か家中か止まる事三月ばかり。爰か二月あしこか半年と。諸州をめぐり。天文

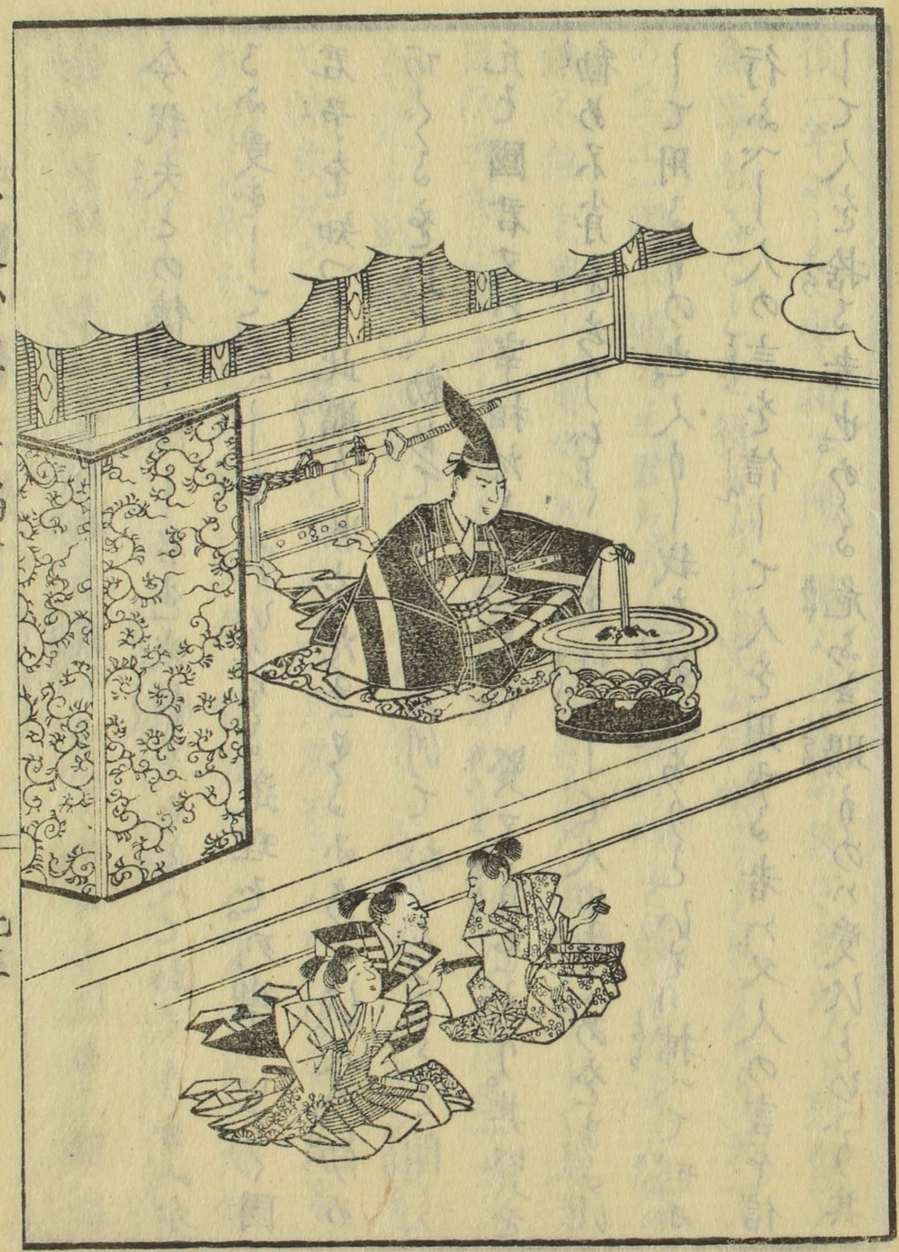
十二年の冬十二月駿河の國に越。今川義元の城下にあるもの
きけり。爰に今川の長臣に庵原安房守といふ者あり。智
勇武略人にすぐれ。又人を見る事に。漢の蕭何が明ありて。あま
ねく名士を吹擧まるると聞えしかども。人物其大機
を心見んと。頓て庵原が家に至り。名札を出して。對面せ
ん事を願へば。安房守も勘助が高名を軍事久し。早速
出迎ひて對面し。其人物を見るに醜き事ぎりあく。又
小男なり安房守曽て人物のこのみくきを嫌ふ。かるに
具なる身として。其名諸方に聞ゆるのみ。尋常の人にあ
らずと。推察致し數日我家にとどめおき。兵法の道を論

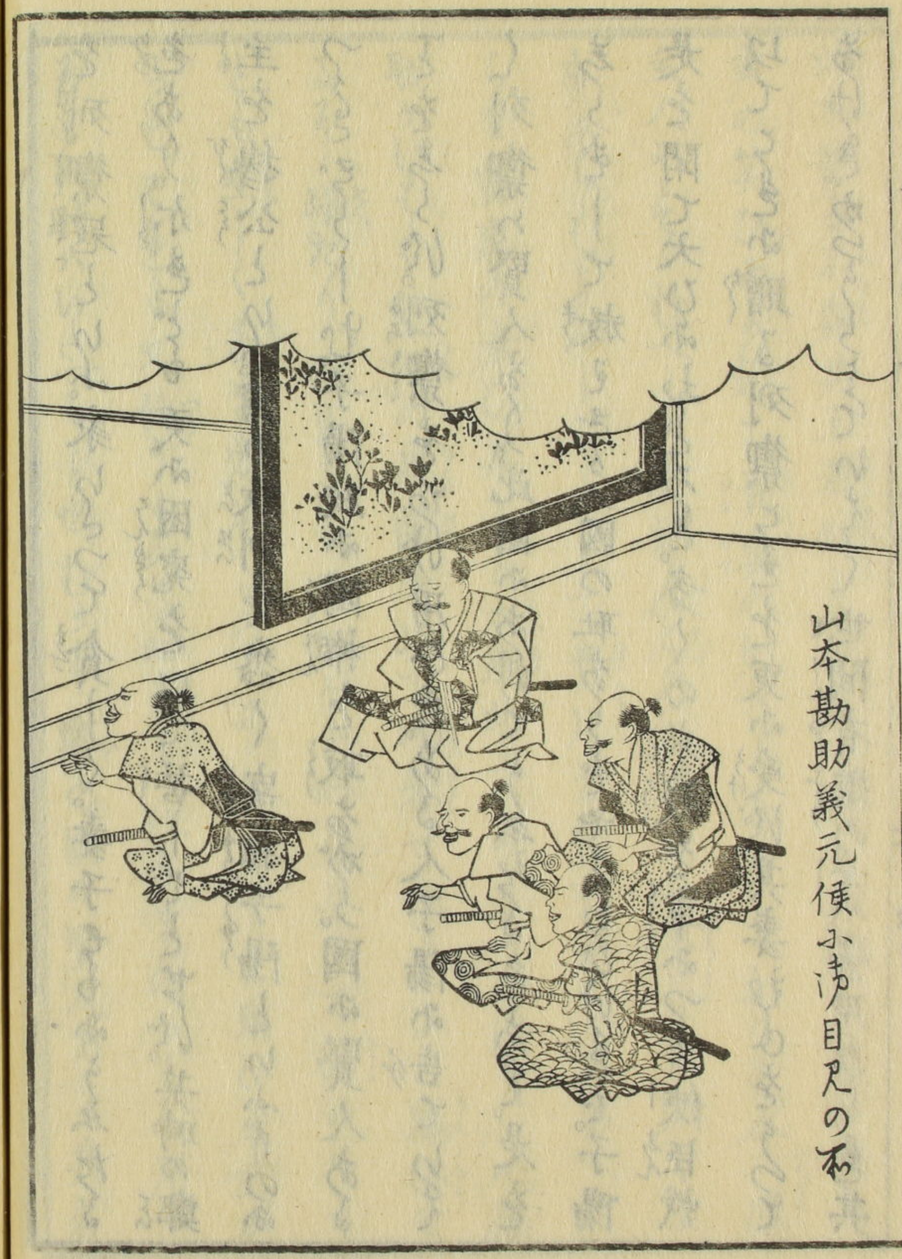
ずるに。中々安房守が及ぶ所にあらず。扨は此人の高名天
下に香ばしきもことわりなるかな。いろいろもして此人を
義元公に吹擧せんとぞ思ひける。庵原は勘助を久しく
留め置て胸中の大智を深くうかがふに。孫呉が兵道の
玄機を以て。已にかがものとおもし。當時諸家の軍法をい
ふ者と。日を同ぜずして語るべからず。安房守深く感伏
し。天晴かかる豪傑の訪ひ来る事。當家の幸ひなり。主く
んにすすめて高禄をあたへ。當家に止めんものをと。頓て義
元にすすめていたる。山本勘助といふ者其産は三河の人。諸
國武者修行をして。普く東西を巡り。適く爰に来り。

某ぐーが家ゐあり。徐うゐ愚意を以てうれゐ胸中ゑ戈機をさぐり伺ふゐ軍法武藝ニッあぐう抜群の者ゐーあ。當世軍術を以て世上ゐ鳴者の。能及ぶ所ゐあらむ。いうゐーてもあげ用ひあべ。當家を冨を謀計ゐゆひーと。申ーー上りをた。義元悦喜斜ゐらむ。吾勘助ゐ名をきくこと左も久ー。速うゐ伴ひ来をとありをた。天文十三年正月勘助を誘引して立出る。義元の左右ゐハ。朝比奈右兵衛岡部三浦の如き。一班老臣其外謀士調者巍ーとして列座甚だ嚴重あり。群奈の諸士ひとしく。眼をあげて勘助ゐ出るをうゐぐふゐ小漢子ゐして相貌らゐくー。左の足遥かゐらーゐかく。座前ゐ歩ミ来る摸様行歩飛ぶがごとく又ハ確乎をふむがごー。一座の若侍ひこの有状を見て笑ひを忍ゐんとをるゐ堪ぐー。末座ゐ列へたる少年五六人忽ち笑ひ出をゐ其ゐうちゐ並居る者も堪うゐ絶て笑ひ出せバ。異口同音ゐ吶とさけびをべ。義元も近臣の忍びうゐたる色の可笑さゐ思ゑ笑ひ催さる安房守群臣のつーーまざるを以て心ゐ悦びを。苦ーーき顔色ゐて。御前ゐ向ひ諸こく修行の名士。山本勘助御目見へ仕ると申をゐ。義元謁者迫もあく勘助を近く召を。高名の壮士去年以来安房守ゐ家ゐ客居せりーとゐ。武術といひ軍略といひ等倫の

たくひのあらざるよしを聞傳へたり。頑くハ即今座前ゑ於て。武術の玄妙をあらはすもべし。當國の士ゑ器用はして。武術ゑ突出たる人希あり。ゑをども一両輩普通のものゝ。先劔鎗の二枝を試ゝんと有るもだ。勘助卒然ゝして荅へるハ。僕も不具の廃人千ゑ一ツも取所あく。試合の義ハ御免下さるべしとゝ。是ハ一座の人〻を始め義元の高声ゑ笑ひあゑどりたづらしめゑを以て。上ゑ嚴重れ威あく下ゑ重禮の法あく。國家ハ久しからぜして亡ぶべきと悟りし故ゑ。少しも謙讓の禮をあさば。某し平生学ぶ所ハ。乱を治め國を安んぜる所の軍法軍略あり。若采配をふるて智策をめぐらす時ハ戦ゑぜして敵を伏し。戦ふとハ人どゑも寡を以て。衆を敗り。野戦攻城ハ是元帥の任たるつとめを專らとし。あへて匹夫の術を好まず。たとへ劔をとづさへ鎗をとり。千軍万馬の中ゑ縦横して終日手をくだきて戦ふとも。是ゑ三級ゑ五級の首を取り。夫を高名とまるハ平士の所業あり。此故ゑ少子劔術鎗術ゑどの小枝ハ不調練ゑひとたづる所ゑく申しけるべ。義元候ハ山本ゑの男つきゑく上不敬の荅話ゑいきどゝりをふくゝ。敬たびたづ彼のことゑもあく。座を立て入ゑへど。勘助安房守共ゑとりでぎぬ。其後安房守勘助ゑ向ひ。今日城中ゑ

始末甚だ不興其上若侍ども曾て慎みの道をもつぱら高声の笑ひをなして。貴客のいきどをりをおこす。今一應主人がもてなしむべし。若汝んごろが軍法の奥旨を問ハるる事あらば。よろしく申上て貴足を當所がもてなめ。然らば當家の幸ひ。某しが大慶此上いあるべうぞといふ。勘助がいそく足下の忠誠を以て吹挙せらるゝと感称堪ざるなり。然ども。又何ぞ心を尽して勧めらるとも空しく舌を労するのみにて。決して用ひるべからざる。とても又仕うまつる心なし。仕うまつるとも用ひあるとも時いたづらど也。むかし鄭の國が賢人あり其名を列禦寇といふ。家いとつて貧しく。妻子ともかうかたる色あり。ホとども更が困窮を以て甚しとせず。其時の鄭主を穆公といふ。國の政刑を悉く宰相子陽といふものがつかさどりむ。子陽既が國権を取あがり。國が賢人あるとをきらひ。列禦をなげ用ひず。ある人子陽が告ていそく。列禦ハ賢人あり。此國があるとうえたる色あり。是をきらはずして救ハざるハ國の恥あらずやといひけるを。子陽是を聞て大ひにおどろき。多くの米穀を車がつて使臣が以てとゝもに贈る列禦とゝを更が受ず。其妻もよをうつてあげき。かつうらみていそく。世間有道の士ハ。皆用ひらるゝ其




山本勘助義元使ふ目尺の石

餘沢を以て妻子皆安逸を楽しむことふくらにあり。國君今我夫との徳を聞し召し米穀をそなへておくり申す。亦るゝ受ぜしてゆくゝ申ハいろある道理ぞ。列禦ゞいたく國君予を知つて此贈り物をたまはるゝふあらば。人の勸めのぐるを以て。初めてゝを出ておくらるゝと聞り。凡そ國君又ハ宰相たる人ハ。よく賢不肖を考り。其賢を勸め不肖を去りぞくるを任として。人のもゝめをまゝして用るゝの也。人り我を盗人ありといたぐ。捕へて刑ふ行ふべし。人の言を信じて人を用ゆる者ハ。又人の言を信して人を捨る者也。あゝる危ふき賜ものハ受じといへり。其

後一年ふして宰相子陽ハ國人の爲ふ殺さるゝたり。列禦ハ無事あることを得ざりと。実ふ列禦ゝ下ぞ去り。天下の主上一國半國の主君たり共。自智の明を發して。よく人の能不能を察し。用ゆべき者ハ。人のもゝめを待ずして是を用ひ。其用ひてあしき人ハ。千人万人もゝむとも用ゆべらぞ。是を戰國の急務とする所あり。今四海大いふ乱ゝて諸侯たがひふ隣國をうかがひ。其虚をうんがへ併呑せん事を計る。是を以て明智の大名ハ皆高名の士を求め。其大智を試ゝ其能をあらひ。家風を起して天下ふあらんと欲するの折柄ゆゑぞ。猶以て賢士ハあくて叶ぬ時也。既ふ

當國の如きハ。駿遠参。三國の大守なれども。明智をふるひ。天下の賢士をつのり用ひたるあらず。四海をたゞかゝろふせんことたやすかるべし。然るに大守の明を以て賢不肖。能不能を考ることあたハず。足下何ぞ進めらるゝとも用ひあらず。まして又天地をひるがへし天下を一つまとに取所の手段あり共。其君たる人信用せざる時ハ。其能をゆるさんに事あたハず。やどこゝも事なさるゝ時ハ。在て益なく徒ごとあり。夫カ鎗弓馬の武術ハ。士卒のなぐさ也。采配をふり万軍をたゞかゝろふまもる。軍法ハ主将の手段也。武の家に生るゝ者ハ小児とゆへども是を考る。いそがんや大國の君としてハ能考るべからず。漢土にハ蜀の前主三顧して諸葛孔明を得たり。文王ハ聖人なりといへども。三たび太公望を磻溪に訪らひたり。是則ち太公望孔明に。戦略軍法ある故也。今大守の某ゞを召るゝ事を。足下のもとめたまふ所也。某いさゝか軍略を考る故あり。兵法の玄機をもさぐらむ。治國平天下の事も論じたまハむ。唯カ鎗の小技を以て試んと考たまふハ。本を捨て末を取といふ者也。又座中の為体く厳重なるゝ。其上勘助を四体不具のかたち者。動作皆無骨なり。一座の侍臣某ゞ行歩するを見て。声を発して笑ひ。大守もひとし

く笑ひ者となるべし。更に豪傑の士を愛するの道にあらず。賢士を用ゆるの君主は愛妾を殺して賢を用ゆるとも聞かず。昔し戦國の時。趙國に平原君趙勝といふ人あり。天下の賢士をあつむ。こゝにかりて至る者數千人に及べり。あるとき一人の躄たる賢士来りて趙勝が家に客たり。ある日河辺にいたり水をくむ。そのさまいと可笑氣あり。此日平原君が愛妾楼上に在てかれ賢士の水を汲みさまを見て。かゝるの侍女と共に声をそろへて笑ひける。其翌日躄たる人。平原君にまゐりていはく。それきく君は賢士を貴び妾をいやしめまふよしを聞り。此故に

賢士皆千里を遠しとせずして爰に来る。吾不幸にして疾ひ故に足なへとなる。然るに昨日たまゝ水を汲むを見て。君が後宮の女共ともを笑ひ者とせり。願くは臣を笑へる女を捕へて首を斬まへといふ。平原君是を切らんとだろりいつて。終に其妾を殺さず。凡そ半年あまりすして賢者日々に退き去て。止まる者多つもあり。平原君怪しく思ひある人に問ていはく。我家の賢者日々に引去いづの故あるぞや。かの人こたへていはく。君さきに足なへたる人を笑ひたる義人を殺しまをざるにあらずして。色を愛し賢を賤しとまふといひて去りといふ。平原君是を

さとりて笑える所の妾が首を斬りすてゝ足あへある人の門ゐいさつて罪を謝せ此事四方ゐ聞へ平原君こそ愛妾を切つて賢士を貴ぶと。後又来る者数千人ゐ及べり。是ゐよつて趙の国天下ゐ威を震ひ名を千歳ゐのこせり。さもこそ賢を愛せる人い我氣ゐ入たる美人を切て。猶賢士をもとゝむ。今大守がうけつの賢士を求めゐそぶ是を急度尊敬せゞ〜若賢士をかろんぜる者あらば厳科ゐ處せらるゝて尓うゞ〜。又そもゝゐどゐあゝくとも近士を一両輩もちゐ其けゐろゞ誰ゐ法度を背くものあらんや。平生の号令厳あらざる故ゐ。他國の客ゐ對して礼をなざる。かゝる有状ゐてハ合戦のときゐのぞこ。威令何ぞ行あるべき。勘助今足下ゐ對し。大守の法令紀律ゐきことを述るハ罪万死ゐあるといへども。此程ゐり深くきんこんを蒙る故ゐ。もぐかりをあへり見ず。申したりと。道理ゐあゝりて申しける。庵原安房守も勘助ゐ説付らきて。足下れ言一〜我が心肝を鍼砭を以て刺がごとしといへり

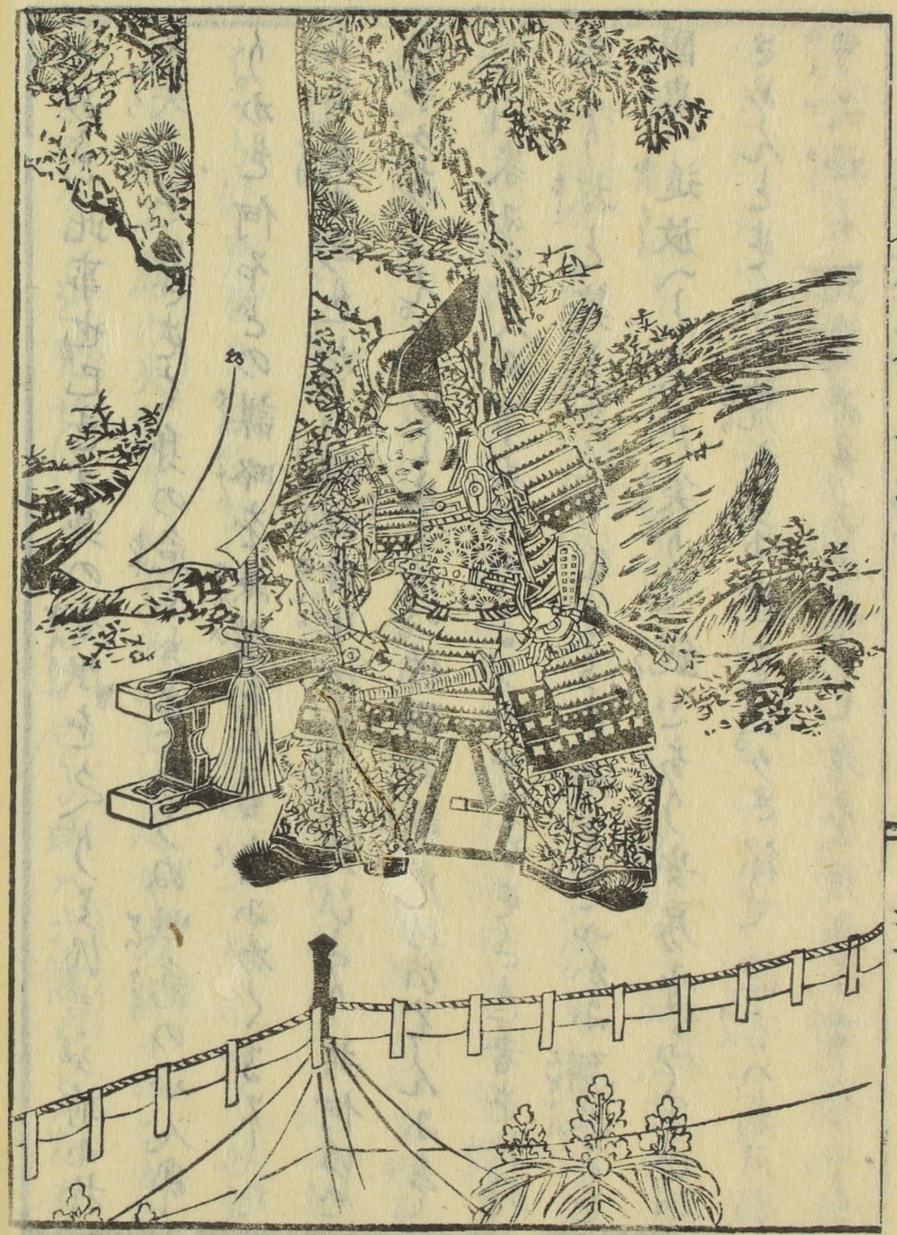
智者の遠見むべあるゐ。十六年後鳴海合戦の時義元の軍勢勝ゐほこりて敢て主将の号令を用ひず。んで織田勢を追うけ。旗本大いゐ空虚せり。信長これを察し後ろの山間ゐり。急ゐ迫り不意を討て大

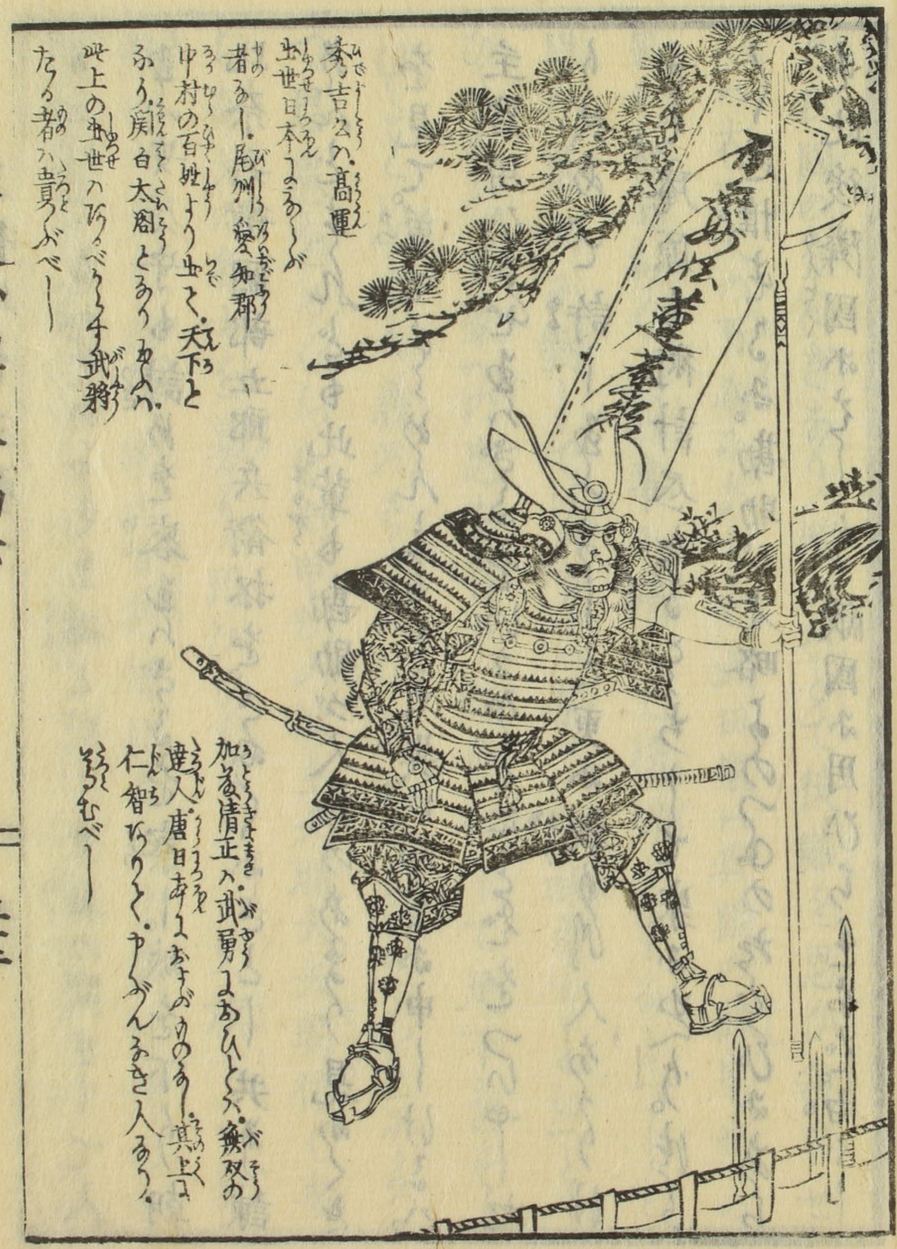
りゐかつ義元捕挾間ゐ討死したまひしハ。法令嚴ゐらざるゐ致さゞるところありといえり

庵原安房守も何とぞ勘助を止め用んと思ひ。再び義元の座前へ立出まゐ。義元憤激の色面上ゐあらはまゐ。いくゐ安房守汝ぢ勘助ゐ駄をあげ武術軍略二ツゐぐらゐ人ゐ卓絶さりと讃るゐよりも對面してとくろ見るゐ。其不敬の狂漢世のもさまものとりゐべし安房守謹んで勘助ゐ申せしことゐも逐一ゐのゐ且又万卒を得安く一將ハ求めがたし。又あまくの大將ハ求め易し。ぐりけつの賢將ハりとむる事あるまゐ。勘助ゐごとき者ハ。智略藝術万人ゐ勝ゐ。當時天下の奇才也。たゐゐ我國ゐめぐり来るを用ひゐまゐして他國ゐ用ひらまゐ。後悔腸をかむとも及びがたし。何とぞ御用ひあつて當家の繁栄を起しゐまゐべしと申し上げまゐ。義元頭をふりて勘助ゐいま汝ぢをせめたる事ハ。短を以て短をせむるといゐべし。今日ゐまゐ對し。武術を試合せよとのぞましハ。たとひ予ゐりゐ所道理ゐ中らゐとも共。過言即咎ゐ及ゐゐしともよゐらん。予ゐ耻辱をなさしたるハ。ゐのまゐ大量ゐきゐあしゐゐや。元を人の才を試るゐ浅きようさぐりて深きゐりさるハ。是通義ゐり武術ハ一人の勝負匹夫のまざある技

へ。誰もとる所ぞうし。軍略と武術とあらべていよ時ハ。武術を浅き道。是を最初ハ試ミ武術衆ふこえたる時ハ次ゐ軍略を討論せん。夫ハい軍法者といもたる。臨濟寺の聖滅和尚なるひハ葛山備中守のごときをあ川め。此者らと得失浅深を計らんと思ひ。先武藝の試合を所望せり。彼も思の外いきどゐりをいざきたるハ是短を以て短をせむるハあらむや。又其人と為こゐくきふより。近士等ちゐらぶ声をあげて笑ひしもりとめてあ川たるハをあらむ。不慮の失あり。大丈夫の士ハ是等の些ゐのことハいきどゐりを発せぶ。小を忍びざる時ハ大謀をこゐ

とあるハ此事也。已もゞ身の分限をくゐりこぶ。予ゞ前ハ於て失言をいざもと身の危ふきをゐらぬ性急の小人那りゐ。ハを何ゐどの謀略を兼備もとも歯ハあくるゐた らむ。長のゐもたる醜奴身中の智を用ひゐり共何ゐどの事ゐあらん。夫のこあらぶ。他國の諸侯のいもんハ多。今川家ハもと人ハ事ハきたるゐ。ハゆうかもとも者を扶持ゐゐり探と笑ゐもんも恥あらむや。もとゆかハ孺子ハを國界へ追放へと其声尖りて鋭どあり。安房守ふゐびいさめんとゐるハ荒らゐハ座を立ゐき称て諫言ハ無用也弓矢神も照覧あゐ。ハのかゐと者を。用ゐる事存ゐも





秀吉公ハ高貴
出世日本一のあるべき
者なり。尾州愛知郡
中村の百姓より出て、天下と
ふり、関白太閤とあり。かゝる
世上の出世ハ万べんなく武勇
なる者ハ賞ぶべし

加藤清正ハ武勇よりあひとゝ、無双の
達人唐日あまねくおよぶかのあり。其上に
仁智ありて、やゝ、ふき人なり。
賞むべし

あらばと。色だてのふもま磯と引し免。奥の間さして入
まふ。安房守も諫めを容まへざるを察し。城を下り朝
比奈兵衛岡部五郎兵衛抔を。さぬぐふさとし共ゐ諫
めんとまれども此輩も勘助が人物のあまり見ぬくき
を見て。曽てまゝめんともせず。異口同音ふ申しけるハ。
主君用ひさせまへざるをいかゞどこゝをついやした
り共。あへて許しまふまじゝと更ふ執りり人ありけ
まで。庵原も術計尽たるこゝちして家ふめくり。ひら
〳〵思惟まるふ。勘助が才略ものつよのたぐひふあら
ず此後隣國ふたゝり敵國ふ用ひらまおで。由く〳〵

き我國のあんぎあり。然らばとて後難を思ひ殺害せ
んハ大丈夫の所為ふあらず。武田家ハ我國の縁家也。の
家ふ勧めあゝ時ハ事ふ臨んで後悔ともあるべしと
思ひ。勘助ふ對してりふやうハ。某し愚昧ありといへども。
ひさまゝ君家への忠を存ず。顔色犯して足下をまく
むるとりへども。義元さらふ信用せらまず。あまふよつ
て思慮をめぐらまふ。甲州の城主大膳大夫晴信を専
ら奇支の名士を募り用ひらるよし又旗下り豪
傑の士多く。殊更家士甘利備前守ハ忠義智謀ふ
そなへたる勇士あり。幸ひ某しと交り深し。一封の書

を調へ足下をまねんと思ふ。是こより甲陽へおもむきゐふまゞきやといふゐ。勘助元来晴信と約をあゝ深く示し合せしる旨あり。てゝ國々を遍歴し。最もや甲州へおもむくとおもふ折ふし。安房守ゞとゞをき。渡りゐ舟を得たる心地して。悦喜色ゐあらはるゑ答へけるゐ晋の豫讓がいはく士ハ已を知る者の為ゐ死をといへり。某ゝ貴宅ゐ草鞋をぬいでより。数月の間ご恩遇を蒙り歓喜一言ゐ尽しがたし。今又書を以て甲州へまねからゝ足下の下意ゑ明白ゐこれを察を真ゐ忠臣の所為感心をるゐたくゝり。若晴信朝臣某しゞ不器を捨あらぞべ。とゝろざしをあさぶけて仕へ。長く貴士の恩をゝすをゞ。をゝやゝゐ書をめぐゝゑへと申をゐぞ。庵原も勘助ゞ唯今の一言此方の心中をゝるといふゐ安堵の思ひをおゝ。いよゝゝかをゞ戈智凡夫のたぐひゐあらゞとおどろき。書をゝゝめてゝさゝけをべ。山本も旅行の用意をゝゝ。頓て甲州へおもむきゝる

○今川義元ハ山本勘助を用ひゑゝゞ又其後幸ひ家来松下嘉兵衛の所ゐ木下藤吉郎あり。是を引上てゝく用ひゐゞ天下の主ゞとあゝん事疑ひあゝ。然るゐ其人を用ゆる事をゝらぞ。終ゐ其身國家迫滅亡せゝを愚

将とりふへし。冨士川ふ放て北条氏康と戦ひの時。木下藤吉郎松下嘉兵衛のやうきを救ひ。又北条家ゟ名高き大将伊東日向守を討取て。北条の軍をゆぶりしハ。是木下ゞ技群の働きあり。手並のほどハ志たり。是ふよりて今川義元藤吉郎を呼出し。大りふをめて手づから恩賞をもあたへ。一組の頭共あもべき筈あるゟ。其事をあく。せめて詞のゟうびあり共あるべき筈あるふ。夫もあし。是ふよりて藤吉郎ありひけるやうハ仁智ある大将ゟうべ某しを呼出し恩賞をも行ふべき筈あるゟ。其事もあるとハ愚将ゟるべし。ゟる愚将ふ仕へてハ何の益ゟあらんと。今川の旗下を逃て。尾州清須の城主織田信長公ふ仕ふ。信長公ハ藤吉郎をゟく用ひふひて終ゟて天下の権を握りたまふ。是外の事ふあらゞ。藤吉郎ふ恩賞を與へゟく用ひたるにゟりてあり。憚りあゞら信長公をたゞめ柴田佐久間等の働きを以て。京都の真中ふ旗を建。

禁裏を守護し奉る事ハありがたし。是偏ふ藤吉郎ゞ働きゟりゟりて也。然らぞ其臣下ハゟ〳〵きのあり。万卒ハ得安く一将ゟ得ゞたしとりふいたての事あり木下ゞあるゞ天下とゟり。木下ゞあけまゞ大名ふもあるゞ

し。事ゐうつたう自家も他家ゐせめらまて。滅亡ゐ及びんもたうりがたし〜木下があけまぢび。信長公も美濃の國江及ゐ於てもあゆふき事度くあり。又遠藤喜右衛門う教さまゆふべし。ゐるゐ其あんをのがまゆふ。木下ゲあるゐうつてあり。武將たる者ハよき臣下あくてハ叶ハざることあり。ゐ紀臣下ハ世界第一の宝あり。智仁勇の三德ある良臣を求むべし〜乱世ハ猶更治世といへども。大入用の事あり。國家を治め万民を撫育するゐハ智仁勇の三德ある人うゆうゆうざるべ。万民を安穏ゐ治むることハありがたし。斗屑の小人何百万人ありとも。大事の用ゐハ立ざるし。又

何ぞ民を治むる事をもらんや。若智仁勇の三德をそなへたる人あくべ。篤実の智者を用ひて國家を治むべし。不忠不義の人ハ決して用ゆべからず。大いゐ國家の害とあり。終うハ主家を亡ぼべし

○今川義元候ハ駿遠三の大守ゐして數万の軍勢あり。向ふ所落さぬことりふ事あし。小國小勢ゐて天下を十年ゐ取らぬ。大國大勢の今川ハ。二年三年ゐ天下を掌握べし。木下を軍師として諸國の大名を攻討ぬ。天下ゐ敵あし。手ゐ立者ハあるべからず。ゐるゐ智仁勇ある木下を用ひざる故う。取べき天下もとり得ぬ。あまりさへ藤吉

郎の謀計ゐ落入て。其身ハ尾州桶狭間の土とあり。四万五千余の軍兵を大方ころせ〜ハ残念千万あり。御先祖の冊誠も水の泡とあり。其時の妻子家来けんぞくハ。皆路頭ゑ迷ひ飢死寒死せ〜あらん。是ゐて人を用ゆるの大事をゐ〜ゆるべし。又よき人を用ゆゑで骨折ゑ苦労ゐ〜ゐ高枕ゐて天下をとり。日本中の最上人武士の長者とゆゑハ大いゐる出世ゐあらもや。又よき人を用ひざる時ハ。已ゑハ愚将といもゑ。其上ゐりくき首を切ゑ。親子兄弟一家一門家来けんぞくまで。皆冥途の鬼とあり。末世末代まで人の笑ひ草とゆるハ口惜き次第あゑ。義元候も木下を用ひゐべ。

眼前ゑ天下とゆらん事疑ひゐ〜其木下を用ひざ〜て。天下を失ひ其上ゐ御先祖の大功を潰し。已ゑハ冥途の鬼とゆるハ不覚千万此上もゆるゑゐ〜ゑ。人を用ゆるの大事ゑ。此今川氏と木下との事ゐてゐくゆるべし。外くを勘へ見るゐ及ばゑ。是ゐき現證也是ゑ〜ゐ川て智仁勇の三徳ある人をえらんで。挙用ゆべし。主君たる者の職分大事の中の大事あり。堯舜等の大聖人さへよき臣下を心ゑ〜ゐけて。求めゐゐ況や其外の者どもハ猶更ゐき臣下ゐ〜てゑ叶ゑぬ事とゆるべし。是ゑ〜ゐ川てゐい臣下を用ひて一家一門家来けんぞく民百姓ゑい

たるまで安心して養ふべし是を仁政といふ。盲目ちんば不仁者までも安穏にくらせるやうにするを仁政といふ。都て世の中に倶暮しをきをいとめ是ぞ幸ひせんと危寄べくらべ。人々分々相応ふくらしの出来るやうにすべし。人々家業を出精して安心して渡世の出来るやうにするを仁政といふ。此外に仁政といふもなきなり。万民を安心して渡世させんぬ。なき奉行ばかりでは出来ぬ事なり。是ふよりてよい臣下を求むべし。なき人を用ひざして。國家を亡ぼしたる人は数多あり前車のくつがへるを見て後車のいましめとすべし是も今川木下の事とぞ

思ふべくらべ一切の主人たる者は此心得あくんばあるべからず。此事をよく考へて。なき人を挙用ひて國家安泰して治むべし。さきを御家は繁昌御子孫を長久あり。文選ふいたく其道おきも。其人あるべ救ふべき事安しとあり。此心は何ゆうの六ヶ敷ことありとも。なき智者さへあるをば。何事もよく治まりて上下共に安泰也是を百姓町人といへ共。相応ふくらも者は此道理をよく考へる。

智者と相談して家をよく治むべし

尾州掃部狭間を東海道鳴海と池鯉鮒との間あり。山中古松の下に今川上総之助義元戦死之所と標石

今川義元毛利新助よりとめらるゝ所

服部小平太

あり。又家来衆の塚ハ山上所くにあり。又善郷村の山上
ゐ千人塚あり。是も今川合戦の時討死したる者の塚？
といふ。尓らば多くの討死なりと見へたり。東海道を通
る人ハ。少し山へ登るべきあるべバ。立寄て見べし

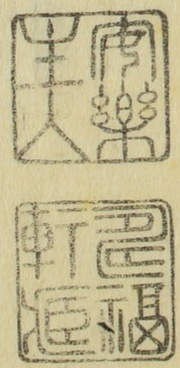
至従心得草三篇下終

至従心得草初編	二冊	日用心法鈔初編二編三編
同 二編	二冊	八部十九冊皆出板
同 三編	二冊	
同 四編	二冊	
同 五編	二冊	

弘化四未歳正月吉祥日

東都下谷金杉

安樂精舍主述



下谷廣徳寺前　和泉屋庄治郎

日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛

大坂心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門

書林